

「国際ボランティア演習」参加学生の意識の変容 —フィリピンの貧富の差の体験を通して—

Changes in the consciousness of students who participated in the "Volunteer exercises"
—Through experiencing the gap between rich and poor in the Philippines—

清水和久
Kazuhisa SHIMIZU

〈要旨〉

国際ボランティアの演習をフィリピンで実施した。5日間は都会のダバオ市のミンダナオ国際大学（MKD）の学生との交流に、残りの5日間は地方のサンイシドロ市にある児童養護施設「ハウスオブジョイ」のこどもとの交流に費やした。日本に比べ物価が1/5であることから何でも買える裕福な都会での生活と片田舎で物が十分でないが人情にあふれた生活の2つを短期間で体験することとなった。学生の感想は田舎での生活についての言及が多く、印象が強かったことがうかがえる。フィリピンの異なった2面性を見たことで学生の意識の変容を明らかにし、今後のボランティア演習の方向性を探る。

〈キーワード〉

国際協働学習 国際交流 スタディツアー

1 研究の背景

平成25年度から、特殊講義「国際ボランティア講座」を立ち上げ、講座の中で開発途上国の現状や貧富の格差が起こる原因などをワークショップ形式でとりあげてきた。また講義で理論的なものを学んだ後に海外の開発途上国を訪問する「国際ボランティア演習」を実施した。この演習はフィリピンのダバオ地方を実際に訪問し、児童養護施設のハウスオブジョイ（以下HOJ）に滞在して子どもたちと寝食を共にし、ボランティア活動を行うものであった。

参加したこども学科の学生からは、外国の子どもと直接関わることができる点で評判がよく、また行きたいという声が多く寄せられた。そのため、平成25年度に行った演習では3年生を対象としたが、平成26年度からは、参加できる対象学年を下げ、1年生から受講可能とした。

そして、今回の海外演習では、地方にある児童養護施設のハウスオブジョイ（以下HOJ）での活動だけではなく、ミンダナオ国際大学（以下MKD）の学生との交流も重視した。これは、グローバル人材の育成という観点で、学生同士の交流も重要であると考えたからである。

また、同じフィリピンでも地方のサンイシドロ市にあるHOJと、フィリピン第3位の人口規模を誇るダバオ市にあるMKDでの活動では、生活スタイルや価値観も違うと考え、両方で活動することを試みたいと考えた。

つまり、平成25年度の活動の視点は日本の生活とHOJでの生活の2つを比較したが、平成26年度は、上記の2つに3番目のMKDがあるダバオ市内の生活も追加することで3つの比較となった。これにより多面的に日本の生活との比較ができると考えた。学生が感じる物の豊かさや観光地化されていない自然の様子、人々の生き様や人に対する接し方など様々な比較の観点を持てることとなった。

2 研究の目的

開発途上国において、格差の激しい地方と都会の両方の生活を体験することで学生の意識の変容を知る。

また、地方の生活と都会の生活と体験する順序が学生の意識の変容に影響があるのかも合わせて考察する。

最後に、この演習自体が学生に与えた影響を分析し、その効果と課題を探る。

3 研究の方法

3-1 研究対象

2014年9月に国際ボランティア演習に参加した学生17名（1年生8名、2年生3名、3年生5名）。グループを2つに分け、Aグループ8名（1年4名、2年1名、3年3名）、Bグループ9名（1年4名、2年2名、3年3名）とする。

3-2 活動の内容

Aグループ											
A	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日
1	開空	ボラン ティア活 動の収集	ウラワ ビーチで 子どもと 遊ぶ	鳥ささ ばいて の料理 マプティ 溪谷子 どもの 活動	漁村訪 問シャ ローハ ムハウ スシュ ノーケ リング	合同活 動アイ ランド ホッピ ング	ボラン ティア活 動老人 ホーム 訪問	市内観 光	フィリ ピン イーグ ル		ダバ オ
2											
3											
4											
夜	ダバ オ	歓迎会			HOJ 送別会						HOJ 送別会
宿	サンシドロ市滞在 (HOJ)					ダバオ市滞在 (MKD)					

Bグループ											
B	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日
1	開空	オリエン テーション	ボラン ティア活 動老人 ホーム 訪問	ヨシダ 農場訪 問食文 化	小学校 訪問	合同活 動アイ ランド ホッピ ング	ボラン ティア活 動幕づ くり	テナイ タイ瑠 璃徳鑑 賞シュ ノーケ リング 体験	小学校 訪問 運動会 見学	鳥料理 ウラワ ビーチ 大學生 主催企 画	ダバ オ
2											
3											
4											
夜	ダバ オ					HOJへ 移動	歓迎会				HOJ 送別会
宿	ダバオ市滞在 (MKD)					サンシドロ市滞在 (HOJ)					

図1 フィリピンでの活動計画

Aグループは9月11日にダバオ空港に到着後、すぐに地方のサンシドロ市のHOJで5日間滞在し、16日にはダバオ市に戻りもう1つの班と合同で島巡りの観光を行う。その後ダバオ市でMKDの学生と交流をおこない21日には再び合流して帰国となる。Bグループはその反対で先にMKDと交流し、その後HOJでの滞在となる。HOJには本校教員が1名引率として10日間滞在、ダバオ市では筆者が同じように滞在した。つまり引率教員は滞在地に滞在し両グループのどちらとも関わることにした。

帰国後、10月に報告会を行い、各自がテーマを決めてプレゼンを行うとともに感想をまとめて報告書を作成する。

なお、帰国後もMKDの学生との交流がイベントで終わらないように、国際共同壁画作成アートマイルプロジェクトを実施し、TV会議などを通して打ち合わせをして共同で絵を描き交流を深めた。

2-3 質問紙調査の実施内容

12月に以下質問紙調査を実施した。

表1 質問紙の内容

- | |
|---|
| <p>Q1. HOJとMKDを訪問した順番は影響があったか？</p> <p>Q2. 反対の順番で回ったら感じ方が違っていたか？
(6件法) 及びその理由</p> <p>Q3. MKDの学生と日本の学生とを比較した印象</p> <p>Q4. ダバオ市内を観光しての印象</p> <p>Q5. HOJの子どもと日本の子どもを比較しての印象</p> <p>Q6. 他の人にHOJへ行くことを勧めたいか？(6件法)
その理由</p> <p>Q7. フィリピンの2面性を見たことで感じたことは何か？</p> <p>Q8. 英語の必要性についてどのように感じたか？</p> <p>Q9. 将来教育に関わる者としてこの演習の意義は何か？</p> <p>Q10. 演習体験は何年で行うのが妥当か その理由？</p> |
|---|

3 研究の結果

3-1 活動の実際

3-1-1 Aグループ(前半HOJ 後半MKDでの活動)

11日の夕方にダバオ到着後、2時間かけてHOJへ移動。その日は寝るだけであった。12日は、楽器の材料となる竹の切り出し、その後は学生だけで近くの海に入る。13日はウラワビーチで子供たちと遊び学生が企画したゲームの実施、14日は午前には鶏をさばいて料理を作りマプティ溪谷で子供たちと川遊び。15日は、近くの村を訪問しHOJのスタッフの澤村氏から村での生活の様子や子どもたちのもっている個別の事情が話された。一見明るそうにしている子供たちも保護者に捨てられたり、虐待を受けたりする過去を背負っていることを聞かされた。

16日はBグループと合同での活動であったが、テンションの高いBグループとは対照的にAグループは盛り上がりなかった。あとで聞くとHOJの子どもたちのことを考えて騒ぐ気分ではなかったとのことであった。17日以降はMKDの学生との交流で、老人ホームの他、市内の観光地もBグループよりは多く訪れた。

3-1-2 Bグループ(前半MKD 後半HOJでの活動)

11日の夕方にダバオ到着後、ホテルへ、みんなで会食後、温水シャワーもある2人1組の部屋で宿泊。12日はダバオ市内観光で、市内の治安を監視する911を訪問。市内のいたるところに監視カメラがあり、治安維持に力を入れていることを説明される。13日は公立の老人ホームを慰問し、学生が個々、老人の手を取って話を聞いてあげる活動を行う。14,15日はMKDの学生と交流し、郊外まで足を延ばしての観光と一緒に料理を作ったり、ゲームやダンスなどもしたりして楽しんだ。MKDの学生は歌やダンスがうまく、日本の学生をうまくリードして盛り上げてくれた。16日の合同活動日はMKDの学生との交流の影響かテンションがとても高かった。後半はHOJに行き、ボランティア活動として幕づくりを行い、サンゴ礁に行くなど子どもたちと自然を満喫した。ダバオでの活動自体は訪問先など多少違うところもあるが、概ねAグループとBグループは似たような体験をしている(図1参照)

3-2 質問紙調査の結果

Q1. HOJとMKDを訪問した順番の影響について

Aグループ(HOJ→MKDの順)の学生の意見

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・「MKDに近づくにつれて貧富の差がいかに激しいかを知る。ショッピングモールできれいな服を着ている子供に会うとHOJの子供たちを思い出しショックを受けた。」 ・「貧富の差、生活の質がこんなにも違うのかということを感じました。お金を出して楽しむのではなく、あるものを十分に活かして、自然のなかで充実した時間が過ごせるということを改めて感じました。そして『豊 |
|--|

か=幸せ』ではないということを実際に感じて知ることができたので、その影響はとても大きかったです。」

Bグループ (MKD→HOJの順) の学生の意見

- ・「ダバオではそんなに貧しい感じはなかったが、HOJや近くの村では服もボロボロで発展途上国の現状を見せられた。MKDで人工物に囲まれ、HOJで自然の中で生きてより人間らしい暮らしができた」
- ・「物にあふれた都会から物のない土地に移ったので貧富の差を感じた。自然も豊かになったので心が浄化、食べ物もおいしかった」

Aグループのほうが日本の生活レベルとギャップが大きいHOJに先に行き、Bグループは日本の生活レベルと表面上はあまり変わらないダバオ (MKD) を踏まえてHOJへ行ったので、Aグループの最初に感じたショックは大きく、Bグループは徐々に慣れていったことがわかる。しかし、両グループともダバオでのお金持ちの身なりと、HOJもしくはダバオのお金がない人の貧富の差を感じている。

Q2. 反対の順番で訪問したら感じ方が異なっていたか？

	そう思う	そう思わない
Aグループ	6人	2人
Bグループ	9人	0人

AもBもまわり方によって感じ方が違うと考える学生が多い。Bグループの回り方 (MKD→HOJ) は抵抗なくフィリピンの生活になじめるという意見が多かったが、Aグループの回り方 (HOJ→MKD) は日本との生活レベルの差がありすぎてショックを受けると思った学生 (Bグループ) が多いことを示している。

Q3. MKDの学生と日本の学生とを比較した印象

MKDの印象を17人の自由記述からキーワード化した。

- ・ 社交性がある (13)
- ・ 笑顔で明るい (6)
- ・ 勉強熱心 (6)
- ・ 歌、ダンスがうまい (2)

日本人の消極的な態度に対して、MKDの学生の社交性が目立った。悪い点の指摘はなかった。またAとBグループの違いは特になかった。

Q4. ダバオ市内を観光しての印象

- ▲道が車で混雑。交通ルールを守らない車も多い (6)
- ▲巨大ショッピングモールもあるが、物乞いもいて貧富の格差がとても激しい (6)
- ▲排気ガスで空気が悪く、衛生管理も十分でない (2)

- ▲治安維持のためにどこでも持ち物検査がある (2)
- ▲日本と変わらないが食事はバランスが悪い (1)
- いろいろな文化が混ざり合い魅力がある (1)
- 人々は日本人にはいい印象を持っている (1)
- HOJと比べると都会 (2)
- にぎやかで楽しい (1)
- 観光地はきれい (1)

マイナス面を挙げる学生が多い。

Q5. HOJの子どもと日本の子どもを比較しての印象

- 明るくて元気、いつ見ても笑顔 (7)
- 圧倒的に元気で、楽しそう (4)
- 掃除、洗濯等自分のことは自分できる (3)
- 全力で生きており強い意志を感じる (3)
- 遊びを見つけるのがうまい (2)
- 積極的に話しかけてくれる
- 純粋で自分たちで工夫して遊ぶことができる

HOJの子どもたちの元気さや笑顔に誰もが圧倒されており、マイナス面を挙げる学生はいなかった。

Q6. 他の人にHOJに行くことを勧めたいか？

全員が勧めたいと答えている。そのおもな理由

- ・ 比較することで日本での生活を見直せるから (5)
- ・ 自分自身の成長に役立つから (4)
- ・ HOJのことをもっと知ってほしいから (3)

HOJに行くことで、自分自身を見つめ直せると考える学生が多かった。そして、自分が体験したことを教育者となった時に子どもに話したいと願う学生も多い。「ほんとの豊かさとは心の豊かさであることがわかるから」という感想もあったのでここから将来の教育者としての自覚を感じた。

Q7. フィリピンの2面性を見たことで感じたことは何か

- ・ 貧富の差がとにかく大きく愕然とした (10)
- ・ 田舎でも楽しそうに暮らしている人を見るとお金があること=幸せではないと感じた。(4)
- ・ 日本は全土を通して恵まれた地域だと思った (2)
- ・ 日本にもこういった2面性があるのではと思った (1)

片田舎であるHOJがあるサンイシドロ市と都会のダバオとの貧富の差、ダバオ市内の中でも巨大ショッピングモールと物乞いの姿を見ての貧富の差、さらには日本とフィリピンの経済格差がある。日本に住んでいることのありがたさを感じるとともに、また物の豊かさが心の豊かさでないことにも気付いている学生がいる。

Q8. 英語の必要性について

- ・「英語の必要性を強く感じた」(16)
- ・「笑顔でいれば何とかなる」(1)

圧倒的に英語の必要性を感じている。英語ができれば、HOJやMKDでもっと深いコミュニケーションが取れたと思う学生がほとんどであった。

Q9. 将来教育に関わる者としてこの演習の意義は何か？

- フィリピン人の生き方がわかった (3)
- 自分自身の性格が行動的になった (3)
- 外国をもっと知りたいと思えるようになった (4)
- 自分自身の視野が広がった (6)

意義については、いろいろあるが下記の学生のコメントが率直に表していると思われる。

「この演習を通して、今までの自分の生活を見直し、自分の思っていた世界観、視野を大いに広げられたと感じています。もし行っていなかったら、表面上の知識や知っているというだけで、本当の意味で理解が出来ていなかったことがたくさんあったと思いますし、実際に行ったことで、このことをまだ知らない、とりわけ行く前の自分のような、ただ知っているだけの人に見てきたこと、感じたことを1人でも多くの人に伝えたいという気持ちになりました。」

Q10. このような演習は何年から行くのが適当か？

- 1年から (11)
- 2年から (5)
- 3年から (1)

1年生からという意見が多いが、その理由として価値観が変わるため、その後行動できる期間が長く取れるからというものが多かった。2年生の理由は教育に関する講義をある程度受けており、考える土台ができているからという理由、3年生が少ないのは就職を間近に控え、他の国へ行く時間が十分ではないという理由であった。

4 研究の考察

4-1 比較対象の多層化の意義

昨年度の演習では、ほとんどが田舎のHOJでの活動体験であった。そこでの比較対象は日本とHOJでの生活の違いであり、日本の子どもとHOJの子どもの生活の違いであった。今年度は、そこに日本とフィリピン、フィリピン国内の都会と田舎、及び都会の中の貧富の差も比較対象となり得た。また日本の子どもとHOJの子ども、日本の学生とMKDの学生という観点でも比較する選択肢が増えたことになる。Q7の答えにもあるが、「お金があることが幸せなことではないとわかった」、「貧富の格差に愕然とした」と感じ、日本の今の生活がこれでいいのかを考えようとしている。これは様々な比較対象があることで自分のこ

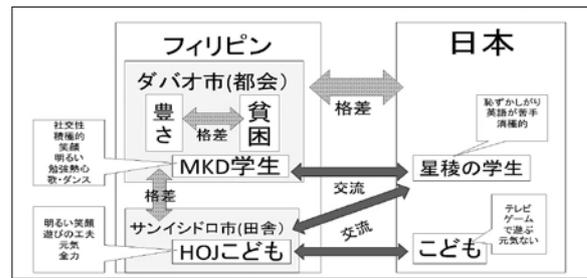


図2 多面化される比較の観点

とを多面的に見つめなおすことができるのだと思う。

4-2 田舎と都会の生活の体験順の影響

Q1の体験の順序によって両グループの感じ方は違っている。これらを心の豊かさと物質的な豊かさで分けて図示化してみた。Aグループは日本の生活とはもっともギャップのある「田舎」を先に経験しており、それだけ感性が鋭く作用したと思われる。Bグループは日本の生活に近い都会から体験しており徐々に慣れていくことになった。

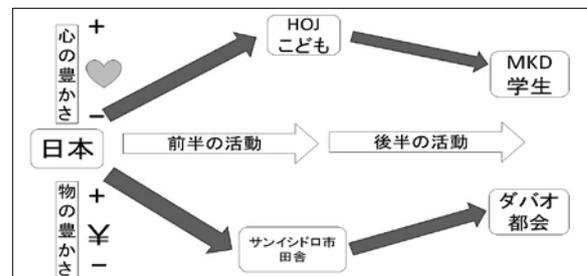


図3 Aグループの変容過程

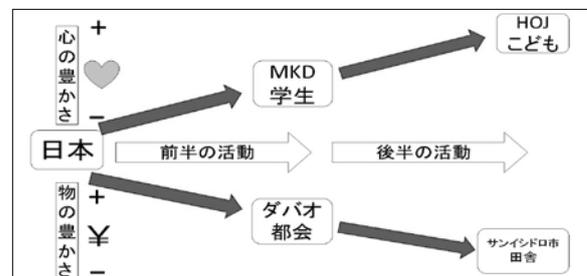


図4 Bグループの変容過程

4-3 まとめ

「物の豊かさと心の豊かさはイコールではないことがわかった」という学生の感想ある。これはHOJでのこどもとの触れ合いから出てきた言葉である。これから教育に携わるこども学科の学生にはぜひ発して欲しい言葉である。またMKDの学生との交流も英語の必要性を感じ、同世代の学生の思いを知る重要な交流である。次年度の演習ではHOJの活動を先に体験しインパクトを与えたうえで、MKDの学生とも事前に決めたテーマをもとに交流させたい。そして学生には世界に目を向ける必要感を感じてもらいたい。

参考文献

- 金沢星稜大学人間科学研究 第7巻 第2号
国際ボランティア演習の講座開設の意義と実際の展開 清水和久